

「娘との日々が楽しい」

盲ろう教育研究会 子育て報告

全国盲ろう教育研究会(雷坂浩之会長)の第23回研究協議会が9月27日から2日間、筑波大付属視覚特別支援学校であった。初日の実践報告では東京都内に住む弱視難聴の中学1年の長女を育てる杉浦真実子さんが登壇。杉浦さんは「専門家や先輩ママなどに支えられ、助けられたことで共に成長できた」と振り返った。長女がピアノを弾く動画も上映され、参加した80人(オンライン含む)から大きな拍手が送られた。

杉浦さんは長女の乳児期から同校の育児学級などに参加。見えないうちから聞こえない中では体験が全てと聞き、「見て楽しむものや聞いて楽しむものも楽しめることは何でも一緒に楽しんだ」と話した。手話に似たサインと短くはつきりした言葉で伝えることを心がけ、トイレットトレーニングも焦らず体の発達を待ったと紹介。乳幼児期は働きかけに反応が薄いこ

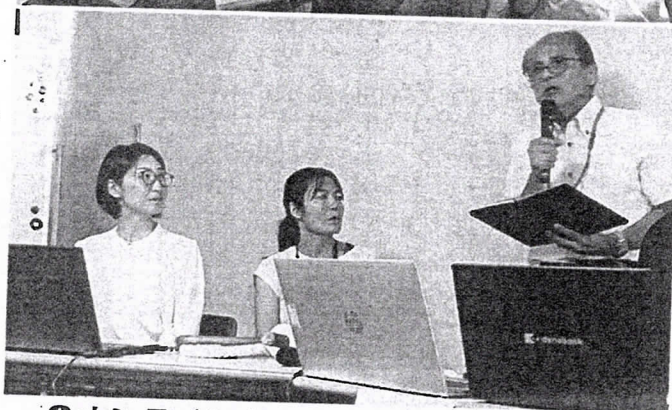
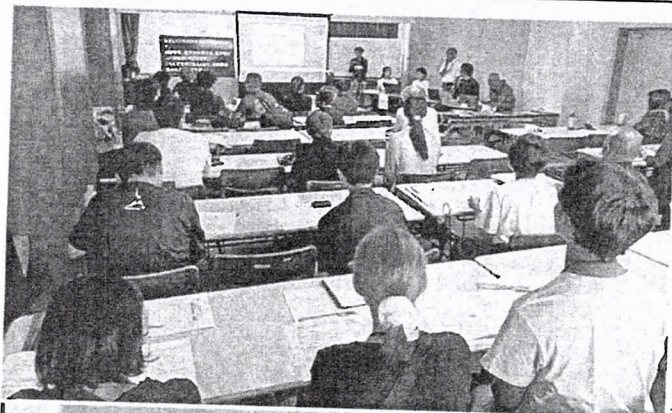
ともあり、不安になったが、実は理解していたと大きくなって知った。「子どもはきつといるし、分かっている。小さな盲ろう児に向き合うママ、パパはあきらめずに取り組んで」と伝えた。

幼児期は同校幼稚部と複数の施設に通い、年中からは地域の幼稚園にも通った。杉浦さんは各施設で長女が共通した支援が受けられるよう、盲ろうの情報などを「サポートブツ

ク」にまとめ、常に持参した。小学部でも担任と目標設定をすり合わせるなどコミュニケーションを重視し、意向を遠慮せずに伝えた。別の盲学校に進んだ長女は現在、いろいろなことに疑問を持つように。杉浦さんはパソコンを使って調べるチャンスと捉え、「娘との日々が楽しい」とも話した。

小学部で長女を受け持った元教諭、亀井笑さんも登壇した。学校での様子や杉浦さんの意見を踏まえ、視機能の評価し、3年で点字から墨字に切り替えたという。タブレット端末の活用で文章の表現力が上がり、デジタル補聴援助システムも活用した少人数のクラスで、友達とのコミュニケーションも豊かになった。めざましい成長を「お母さんとの一対一のコミュニケーション」が基盤にある。障害の状況を考慮し、環境を整えることが「大事」となどと話した。

【谷本仁美】



①オンラインとのハイブリッドで開催された全国盲ろう研究協議会—いずれも東京都文京区の筑波大付属視覚特別支援学校で②(左から)盲ろうの子を育てる杉浦真実子さん、元同教諭の亀井笑さん、全国盲ろう教育研究会の雷坂浩之会長